

引用文献

1. KÜTZING, F. T. (1843): *Phycologia Generalis*. LEIPZIG.
2. ————— (1868): *Tabulae Phycologiae*. Band 18. NORDHAUSEN.
3. FELDMANN, J. et HAMEL, G. (1936): *Floridées de France*, VII, Gélidiales. *Rev. Algol.*, 9 (1): 209-264.
4. 朝比奈泰彦 (1939): *隠花植物図鑑*. 東京.
5. SMITH, G. M. (1950): *The Fresh Water Algae of the United States*. New York.

千葉県大原産の一珍藻

オホノアナメ (*Agarum oharaense*
YAM. sp. n.) に就いて

山田幸男

先般千葉県大原町の漁業組合専務理事大野磯吉氏から久し振りに同地先にて採集された多数の海藻標本の送附を受けたが、其の内に誠に珍しい一褐藻が見られた。それは明らかにアナメ属 (*Agarum*) の一種で已に同氏もその手紙に述べていられる様に今迄本邦に知られたものとは明らかに異なつたもので特にその茎の状態は我邦北部に産するアナメ (*A. cribrosum* BORY) とは全然異なり明らかに扁平でその両縁からは屢々根状の附属物が多少共発出している。此の標本は何れも暴風後等に大原町地先の海岸に打揚げられたものでその生育深度は不明であつた。由来大原という処は以前から興味ある海藻の産地として知られており、筆者も学生時代から故岡村先生の御言葉に従つて屢々その地を訪れた。当時巢鴨・渋谷等に住んでいた筆者は、割引の一番の市電にのつて両国へ行き出来る丈け早い汽車にのつて大原へ行き採集をして夕方帰京したが、可成に変つたものをとる事が出来た。ハスチギヌ (*Nienburgia japonica* (YAM.) KYLIN) カヘルデグサ (*Binghamiella californica* (FARLOW) SETCHELL et DAWSON) 等も初めて同地に於いて採取したものである。その後多数の海藻採集者が同地を訪れたにも係らず此の *Agarum* は誰も報告していない。従つてこれは余り浅所には生育しないもので比較的稀なものではないかという想像がつく。然るに此度上記の如く大野磯吉氏により

此の種が採取されたことは誠に喜びに堪えない。元來同氏は古くから広く水産一般に対して深い知識と経験を具えておられると共に特に海藻に対して深い興味と関心を有しておられ（嘗つて殖田三郎教授により命名されたオホノノリ (*Porphyra onoi* UEDA) も同氏の名をとられたものである) るので此度の発見も偶然ではない。

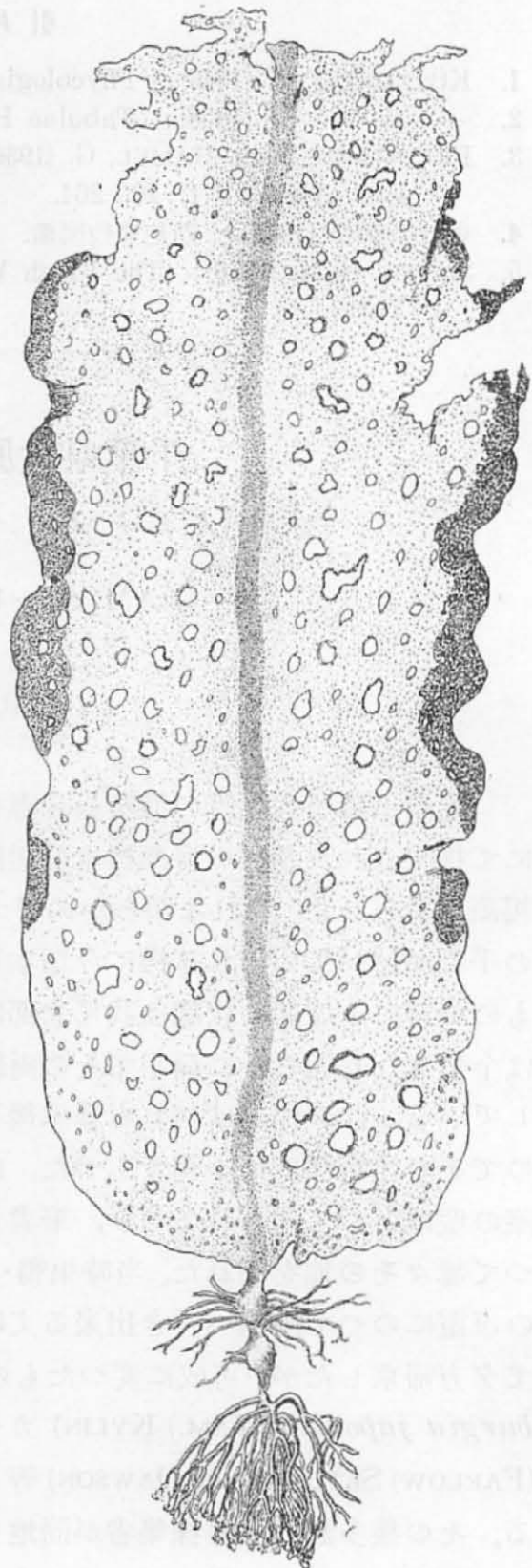
そこで更に同氏の新個体の採取を依頼しておいた処その努力によつて多数の新標本が打揚、又は網にかかつて発見採集され、又その後大原町字大井に於いて潜水夫によつて 17 m の海底に生育するものが採取された。即ち相当な深海性ものといわねばならない。

今少しく此の種の性質を記してみるならば、

根は纖維状で細く、茎の下端及び基部附近の両縁から発出し 3~5 回位又状に分岐し、先端へ向い漸々と細まり先端で地物に附着する。

茎は長さ 5~6~7 cm 長く明らかに扁平で幅 1 cm 内外、但し局部的に幾分より広くなる所があり、殆んど常に 1~2 回捩れている。両縁は略平滑であるがその所々から根状体を発出する。此等の根状体は直径 1 mm 内外の纖維状で 1~2 回又状に分岐し、根と殆んど同じ形態を有する。

葉は倒卵形又は楕円形、長楕円形等をなし長さ約 60 cm 位であるが何れ



Agarum oharaense YAM. $\times \frac{1}{5}$

の標本もその先端部を欠く為に正確な長さは確かめられない。幅は20~25 cm, 基部は円く, 余り心臓形は呈せず(アナメ *A. cribratum* BORY に普通に見る様な scroll は見られない) 縁辺は全縁或いは幾分波うち或いは極めて短い刺状の突起を具えている。又中央には1本の中肋を貫通しているが中肋は幅1.5~2 cm 位あるも明らかに厚くなっている部はその中央附近のみでその葉面との境は余り判然としない事があり, 特に上部では余りはつきりしない場合が多い。葉面は平滑で皺なく薄い革状で大小多数の孔を有する。孔は略円形で幾分楕円形, 卵形のものも混り屢々孔の周縁は一方の面へ向つてまくれる。孔の配置には一定の規則は見られないが概して中肋附近のものが一般に大形で辺縁附近のものは小形である。大形のもの直径1 cm 内外ある。

子囊斑は葉面の中部辺の両縁に沿い両面に生ずるが後全面に広がる。

上述の性質から見て本種は北米バンクーバー附近に産する *A. fimbriata* HARVEY に近いものではないかと思われる。特に特異な茎の形態は即ち扁平にしてその両縁から根状附属物を発する点に於いて共通している。然しその葉面は大原産のものに於ては平滑で大小多数の孔を有するに反し *A. fimbriata* に於いては孔は殆んどなく又は甚だ尠く且つ葉面は平滑ではなく多数の皺を有する点等に於いて異なっている。依つてこの種には新たに *A. oharaense* なる学名を与え, 又この発見者なる大野磯吉氏の名を記念してオホノアナメなる和名を以つてこれと呼ぼうと思う。正式の記載文等は何れ規則に従つて記述する筈であるが取りあえず此処に此の新藻を紹介する次第である。

(北海道大学理学部植物学教室)

シルヴァ博士の来訪

瀬木 紀 男

緑藻ミルの研究で有名な, 米国イリノイス大学教授シルヴァ博士が, バンコックで開かれた太平洋学術会議の帰途日本に立寄られ, 忙しい旅程をさいて昨年12月5日小生を訪問した。

同氏とは7年振りに再会し, お互に旧交を温めた。かつて小生がパークレーの加州大学を訪れた時, パーペンフス教授の下で研究中であつた氏が,